僕の目を覗き込む様に、その子は、きつい目で、じっと、僕を見つめた。

その子は、彼女と同じ様に、毎朝、同じ時間帯に、バス停で見かけている子だった。
しかし、僕は、その子の存在は、その瞬間まで、今迄、全く、意識していなかった。

その子も、彼女も僕の方に強い視線を向けていた。
僕は一瞬、混乱した。

まさに、その子と彼女は、人前で、僕に、生と死の間の選択のような、何か、重大な僕の決断をせまっている様に思った。

すべてが急で、心の準備のなかった僕は、完全に混乱してしまった。
自分の気持ちは、あくまで彼女の方に向いていたが、それを、彼女もおろか、だれにも、知られるのを恐れた。

結局、僕は二人から目をそらし、「まったくの知らぬ顔」を装い、自分の立っている前方に目をやって、その場を逃げた。

僕は、自分の学校の仲間の間に身を隠し、僕はそのまま来たバスに乗ってしまった。

二人の強い眼差しを感じていたが、僕は振り向いて見る勇気もなかった。

僕は振り向けなかった。

Candy in the Heart 460

104 僕は振り向けなかった・・・・・・・・・・・458

萩原良昭